

日野町にIターン就農し、今年で4年目を迎えた高田昭徳さんは、米づくりを中心に町内で農業を営んでいます。

出身は福岡県糸島市。実家は非農家で、米づくりに取り組んだことはないとのこと。鳥取大学農学部に進学し、砂漠の緑化について研究していた高田さん。「研究者になりたかった」と振り返ります。

きっかけは大学時代にかかわったNPO法人学生人材バンクの活動。中山間地の地域おこしや地域活動の支援などを行う中で、里山元気塾（小谷博徳塾長）の農業体験に参加し、小谷塾長に誘われたからと高田さんは話します。「県東部の農業法人で雇用就農し米づくりに携わっていましたが、独立のきっかけを探していたところでした。農地と農業機械の譲渡を受けられたことが、大きく影響しました」と感謝している様子。「米づくりの魅力は、種をまき苗を育て、収穫まで携われる」と高田さん。「苦労も喜びもいつも一緒。外で働けて好きなことばかり。やりがいがあります」と、充実した毎日を送っています。

知らぬ土地での農業経営に不安は、と聞くと「不安はありませんでした。“やってみて、ダメならダメ。後戻りはしない”という決意で始めましたから。つらいこともないよ」と、笑顔で話すところに、高田さんの気さくな人柄を感じます。「この地域で、皆さんには良くしてもらってばかり。いつか恩返しし

## 農業を営む小さな経営者が 手を取り合い、町を支えたい

たい」と周りへの感謝も忘れません。

作れなくなったからと、地域の人から田んぼを頼まれる高田さん。およそ2.8畝で始めた米づくりも、今ではおよそ4.1畝に増えています。

販売は直販のみで、米子市周辺までは、高田さんが月1回直接届けています。「話しをしながら信頼関係を築いています。おいしいと言ってもらえた時が、一番苦労が報われる瞬間です」と、ふれあいを大切にされた販売方法を取っています。また、宅配にも対応し、南は鹿児島、北は宮城までと全国に向けて発送しています。

「この米を食べて知ってもらえるきっかけを作りたい。可能であれば、消費者の方に日野町



たかた あきのり  
高田 昭徳さん  
(下黒坂)

「人のつながりと、農地、機械の取得のタイミングが合ってIターンできました。“おいしい”という言葉が一番うれしい。農業はやりがいがある」と、就農に熱い思いを語る高田さん。

に来てもらって、米が育つ環境を見ていただき買ってもらいたいと思います」と、高田さんは安心して買ってもらいたいと考えています。

そして、町の農業を担うという期待について「これから10年の間に、地元やIターンの若い担い手を育て増やしたいと考えています。1～2集落に1人の若い担い手が入ることで、地域に元気が出ると 생각합니다。夢は、農業を営む小さな経営者が手を取り合い、町を支えられるようにすること。まず、自分がしっかり取り組みたい」と、熱い思いを話します。

最後に、就農を考える若者へ向け「就農について相談や農業体験をいつでも受けます」と力強く拳を握りました。



シイタケに愛情を注ぎ、シイタケの話をする笑顔で魅力を語る廣瀬俊介さんは、兵庫県明石市出身。平成24年の春、鳥取県農業担い手育成機構の研修生として日野町にIターンし、町内のシイタケ農家で栽培技術を学んでいます。

廣瀬さんの実家は非農家で、家庭菜園に親しむ程度だったそう。小さいころから植物が好きで、植物関係の図鑑ばかり見ていたと話します。

将来を考え農業高校へ進学。そこでキノコの勉強をすると、さらにキノコにのめり込み、高校生ながら地元のキノコ研究会にも入会していたほど。「季節問わず、山などに出かけてキノコ狩りをしていました」と廣瀬さんは振り返ります。

そして、“山陰の方がキノコが多くあるのではないか”“研究と栽培指導を行う（財）日本きのこセンターがある”などの理由で鳥取大学農学部へ。

いったんは野菜を販売する仕事に就職するも、懇意だった高田昭徳さんが主催する交流会や里山元気塾の農業体験などに参加する中で、シイタケ農家との出会いが。

後継者不足で困っているという話を聞き、それなら自分が継ごうと日野町へIターンしました。「原木シイタケの栽培は、趣味でできたらと思っていました。自分がシイタケ農家になれるなんて」とうれしそう。

今は、午前8時ぐらいから黒坂周辺などの山に入り、ほだ木の切り出しなどを行っていま

## 町にシイタケ農家が増えてほしい そのために、まず僕が頑張ります



ひろせ しゅんすけ  
廣瀬 俊介さん  
(黒坂)

「山の中で小鳥のさえずりを聞きながら仕事をしています。シイタケは農薬を使わない、水やりもしないんです。“自然の力”ってすごいです」と、さわやかな笑顔を見せる廣瀬さん。

す。収穫は3月中旬ごろから5月中旬ごろまでと、11月ごろから雪が降るまでの2回行うそうです。

シイタケ栽培の魅力を聞くと「山の中で小鳥のさえずりを聞きながら、シイタケと向き合う素晴らしい仕事です。毎日森林浴です」とさわやかな笑顔で話す廣瀬さん。また「シイタケが生えたときは楽しく、おいしいと言ってもらえると苦労が報われます」とも。

Iターンして1年4カ月。今は研修生ですが、今年8月には就農予定です。両親も応援しておられるそうで、廣瀬さんのシイタケを実家周辺で紹介されているそうです。

これから日野町でシイタケ栽培を続けていくにあたり、夢は

たくさんあると話す廣瀬さん。「米子市内などの店頭に置いてもらったり、自ら試食販売をしています。シイタケは農薬を使わない安心して食べられる食材です。もっと食べてもらえるように紹介していきたい。今後は直接、消費者に届けたり、スーパーのほか飲食店にも売り込みたい」と、販路拡大に力を入れているほか、「以前はシイタケ農家が町内に50人ほどおられたと聞いています。増えていくように、まず僕が頑張りたい」と、決意ものぞかせました。

「シイタケ嫌いな子どもたちがいなくなればいいな。初めて食べるシイタケが原木栽培のものであってほしいですね」と、廣瀬さんが見せる笑顔からは、夢と希望があふれていました。